

○安藤 仁<sup>1</sup>, 藤村 昭夫<sup>1</sup>

<sup>1</sup>自治医大臨床薬理

膵β細胞によるインスリン分泌とインスリン標的臓器におけるインスリン感受性にはそれぞれ日内リズムがあり、糖代謝の恒常性に重要な役割を果たしている。糖尿病ではこれらの日内リズムも障害されていることから、効果的な治療のためにはその是正が必要である。

現在のところ、インスリン感受性を改善させる薬物（チアゾリジン、ビッグアナイド）に関しては、薬物動態への影響も含めて時間治療の有用性を示した報告はほとんどない。一方、インスリン分泌低下に対する薬物療法に関しては、基礎インスリン分泌を標的とした持効型溶解インスリン、追加インスリン分泌を標的としたグリニド、超速効型インスリンなど、インスリン分泌の日内リズムを考慮した様々な治療薬が臨床で使用され始めている。これらの薬物は、血糖コントロールの改善のみならず、従来の治療薬で問題となる遷延性低血糖や体重増加のリスク軽減にも有用である。

最近、演者らは、2型糖尿病患者の日内リズムは体内時計のレベルで障害されていることを明らかにした。体内時計障害と耐糖能との関連は耐糖能がほぼ正常な時点からすでに認められており、2型糖尿病の予防のためには体内時計を正常に維持する適切な生活習慣（就寝・起床時刻、飲酒量など）が重要と考えられる。しかし、体内時計に悪影響を与える生活が当たり前の現代社会においては、生活習慣の是正は困難であり、生活習慣を変えることなく体内時計を是正できる治療薬の開発が切に望まれる。